Press Release

HIGASHIKAWA HOKKAIDO JAPAN
— THE TOWN OF PHOTOGRAPHY —

2025年　第41回写真の町東川賞

受賞者発表
授賞式及びフォトフェスタ案内

写真文化首都
北海道「写真の町」東川町

第41回 写真の町東川賞受賞作家

＜海外作家賞＞ 対象国：リトアニア共和国

アルトゥーラス・ヴァリャウガ氏（Arturas VALIAUGA）

受賞理由：写真集『About the Land of Longing』（2013年）など一連の作品に対して

＜国内作家賞＞

今 道子氏（KON Michiko）

受賞理由：展覧会「今道子 2024 作品展」（PGI、2024年）など近年の活動に対して

＜新人作家賞＞

鈴木 のぞみ氏（SUZUKI Nozomi）

受賞理由：展覧会「Words of Light」（第一生命ギャラリー、2024年）、「The Mirror, the Window, and the Telescope」（ポーラ美術館 アトリウム ギャラリー、2024年）など近年の活動に対して

＜特別作家賞＞

守屋 友樹氏（MORIYA Yuki）

受賞理由：「潮騒の部屋」シリーズ（2024年）に対して

＜飛彈野数右衛門賞＞

阿波根 昌鴻氏（AHAGON Shoko）（故人）

受賞理由：展覧会「阿波根昌鴻 写真と抵抗、そして島の人々」（原爆の図 丸木美術館、2024年）、「人間の住んでいる島」（東京工芸大学 写大ギャラリー、2024年）などに対して

第41回 写真の町東川賞審査会委員（敬称略／五十音順）

安　　珠（あんじゅ）	写真家
上野　修（うえの　おさむ）	写真評論家
神山　亮子（かみやま　りょうこ）	学芸員・戦後日本美術史研究
北野　謙（きたの　けん）	写真家
小原　真史（こはら　まさし）	キュレーター・東京工芸大学准教授
柴崎　友香（しばさき　ともか）	小説家
丹羽　晴美（にわ　はるみ）	学芸員・写真論
原　耕一　（はら　こういち）	デザイナー

第41回 写真の町東川賞審査講評

第41回写真の町東川賞審査会は、2025年2月20日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞39名、新人作家賞45名、特別作家賞20名、飛彈野数右衛門賞31名、海外作家賞15名。例年どおり、午前中は写真集や資料をじっくりと閲覧し、午後から審査会委員8名が合計140名（延べ150名）の作家より5つの賞を選ぶ審査に入った。

国内作家賞は、最終段階で4名に絞り込まれた。この段階になると甲乙つけ難い、異なった魅力を持つ作家が並ぶことになる。熟考を重ね、議論と投票を繰り返した結果、僅差で今道子氏が選ばれた。今氏は、2021年から2022年にかけて神奈川県立近代美術館 鎌倉別館で開催された大規模な個展「フィリア―今 道子」で注目を集めたが、今回の審査では、モチーフとオブジェの幅を広げ、死生観をさらに掘り下げた新作も大きく評価された。1987年の第3回東川賞新人作家賞の受賞者でもある今氏が、40年弱の年月を隔て、新たな展開で国内作家賞に輝いたことを喜びたい。

毎年、混戦かつ接戦となる新人作家賞だが、今年は、13名に絞り込んだ段階の投票で多くの票を集めた鈴木のぞみ氏に決定した。鈴木氏は、日常の事物に潜む像を、写真の原理によって顕在化する試みを続けている。「光の言葉」の媒介者・翻訳者であれたらという鈴木氏のアプローチは、近代の産業の発展を体現するメディウムでもある写真によって、見る見られるという権力的な構造を重層的に照らし出す。歴史的・社会的出来事と個人的な記憶を繊細に織り成しつつ、大きな物語と小さな物語をダイナミックに交叉させていく近年の展開は、新人作家賞にふさわしいものだろう。

特別作家賞に選ばれたのは、第二次世界大戦末期アメリカ軍の侵攻を想定し、終戦まで急造されたが実際に使われることはなかった、北海道東沿岸部に点在する戦争遺構のトーチカをリサーチした守屋友樹氏である。風景と敵に対する眼差しについて考えるようになった守屋氏は、トーチカをピンホール・ルームにし、銃眼と呼ばれる敵を撃つために設けられた小さな窓から見える風景を像としてフィルムとノートに写した。この「潮騒の部屋」シリーズが、東川町文化ギャラリーの受賞作家作品展でどのような眼差しを浮かび上がらせるのかということにも、期待が膨らむ。

飛彈野数右衛門賞は、戦後米軍に占領された沖縄・伊江島で農民たちと共に非暴力の土地闘争を行った阿波根昌鴻氏に決定した。阿波根氏は、強制的な土地接収や米軍の横暴を記録するために1955年から撮影をはじめ、島で唯一のカメラを米軍に抵抗する手段として活用していったことで知られている。2024年に開催された展覧会「阿波根昌鴻 写真と抵抗、そして島の人々」は、遺されたネガ約3200枚をデジタル化し、日常のスナップや住民たちのポートレイトを含めて構成されたものであり、平和運動家としての阿波根氏の活動のアクチュアリティを現在へとつなげるものだった。

海外作家賞は、菊田樹子氏の調査に基づいた丁寧な説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国のリトアニア共和国から、アルトゥーラス・ヴァリャウガ氏が選ばれた。ヴァリャウガ氏の作品は、移民、バルト海を渡り大学や仕事に行く人々、ドイツとソビエトに翻弄され続ける小さな町、原発のある村など、さまざまな被写体から、リトアニア人とは誰のことを指すのか、そのアイデンティティについて問いを提示する。失われた過去へのノスタルジーや悔恨ではなく、何が変わったのか、なぜ変わったのかを、冷静に検証しようとしている展開が高く評価された。

今回で第41回となる写真の町東川賞だが、その特徴は、毎年夏、授賞式と同時に作品展やシンポジウム、受賞者と交流するパーティなどが開催されることにある。われわれも、どこかでその東川町フォトフェスタの空間を思い描きながら審査をすすめている。つまり東川賞の審査は、その日だけで完結するものではなく、現在、そして過去と未来の東川町フォトフェスタに接続されているといえよう。1985年の「写真の町宣言」から、2014年の「写真文化首都宣言」を経て現在に至るまでその空間を作り上げ続けている、町の人々の多大な努力と共感に深く感謝したい。

写真の町東川賞審査会委員　**上野 修**



第41回写真の町東川賞　＜海外作家賞＞　対象国：リトアニア共和国

アルトゥーラス・ヴァリャウガ（Arturas VALIAUGA）

リトアニア共和国・ヴィリニュス在住

1967年リトアニア・ヴィリニュス生まれ、同地在住。
ヴィリニュス工科・デザイン大学で写真の技術を学び、2010年にヴィリニュス芸術大学で写真とメディアアートの修士号を取得した。
ヴァリャウガは、1990年半ばから一貫して社会的アイデンティティと時間をテーマに作品を制作してきた。リトアニアの歴史とソビエト時代の経験が、彼のすべてのシリーズやプロジェクトの支点となっているが、その姿勢が過去への追慕や懐古主義に陥ることはない。今日、私たちを取り巻く環境を丁寧に観察し、何が残っていないのか、何が変わったのか、なぜ変わったのかを、写真を通して検証しようとしている。近年は、特に現在のヨーロッパや世界の中におけるリトアニアのアイデンティティを問う作品を制作している。
主な個展に、「Still Identity」国立美術館（ヴィリニュス、2006年）、写真美術館（シャウレイ、リトアニア、2007年）、ゲーテ・インスティトゥート（ロッテルダム、オランダ、2008年）、「Between the Shores」現代美術センター（グダンスク、ポーランド、2008年）、カウナス・フォトグラフィ・ギャラリー（カウナス、リトアニア、2010年）、「In Trust：Reframing Wales Histories」Turner House Galley（ウェールズ、イギリス、2016年）がある。
作品は、国立美術館（リトアニア）、MO Museum（リトアニア）、ライデン大学図書館（オランダ）、サンダーランド大学（イギリス）、Imago Mundi Collection（イタリア）などでコレクションされている。

＜作家の言葉＞

写真の町東川町の海外作家賞を受賞できたことを光栄に思います。日本は、私の故郷から遠く離れていますが、私の心にはとても近い場所です。
私にとって写真とは、旅であり、冒険であり、新しいことを経験し発見する機会でもあります。そしてカメラは、異なる現実―すなわち、もはや存在しない、変わりゆく現実への扉を開く鍵です。写真を撮ることは、他者の人生を覗き込み、それを自分のものとして飼い慣らし、あたかも自分の記憶であるかのように経験する手段といえます。写真には、人と彼・彼女らを取り巻く環境の相互関係の結果として、時間が刻まれます。これは、色、光が描く線、記憶、あるいは明日への予感としてイメージというメディウムの中に残された存在から、感じたり、見たり、あるいは推し量ることができるのです。
イメージは、私生活、時間や記憶の表徴が展開する、社会的なコミュニケーションや対話の領域を創り出し、明確化します。写真という宙を漂う現実は、過去の記録であり、それは情緒的瞬間の主観的な経験として息を吹き返します。
写真における真実とは、目に見えるものではなく、見ることで感じられるものです。
私は写真の力を信じてはいませんが、人々や取り巻く環境が示す表徴を信じています。そのイメージが、写真として姿を留めるのです。私は、自分がそのすべての一部を成していると感じています。
イメージが顕わにするコンテクストは、イメージそのものよりも重要なものとなるのです。

アルトゥーラス・ヴァリャウガ



スティル・アイデンティティ
Still Identity
2005-2006
Isaakas Kaplanas. In Memoriam. Amsterdam. The Netherlands.
イサーカス・カプラナス　追悼
アムステルダム、オランダ



スティル・アイデンティティ
Still Identity
2005-2006
Dutch Soldiers. NATO in Šiauliai. Lithuania.
オランダ兵士たち　NATO シャウレイ基地、リトアニア



岸と岸の間に
Between the Shores
2007-2008
Fellow Passenger
同乗者



岸と岸の間に
Between the Shores
2007-2008
Caboose
最後部



憧れの地
The Land of Longing
2012-2013
Gate to Perkaliai Manor, 2013
ペルカライの荘園への門、2013 年



憧れの地
The Land of Longing
2012-2013
Budrys' house doorstep, 2012
バドリス家の玄関先、2012 年



Self portrait in Mexico #7、2016

第41回写真の町東川賞　＜国内作家賞＞

今 道子（KON Michiko）

神奈川県在住

神奈川県鎌倉市生まれ。創形美術学校版画科卒業後、東京写真専門学校にて写真を学ぶ。85年の個展「静物」より、本格的に作家活動をスタート。野菜や魚などの食材や、花や昆虫を素材として特異なオブジェを制作、それを自ら撮影し印画紙に焼き付けている。豊かなイマジネーションから生み出された数々のオブジェは、今の手によりモノクロームの印画紙上に浮かび上がり、虚と実が織りなす独特な美の世界を創り出している。

近年の主な個展に「今道子 2024 作品展」PGI（東京、2024年）、「今道子 Michiko Kon」トトノエル（福島、2024年）、「フィリア―今 道子」神奈川県立近代美術館 鎌倉別館（神奈川、2021年）がある。近年の主なグループ展として、アルル国際写真フェスティバル「I'm So Happy You Are Here」Palais de l'Archevêché（フランス、2024年）、「From Japan with Love」Galerie Écho 119（フランス、2024年）、「写真表現と技法の結晶化」フジフイルム スクエア 写真歴史博物館（東京、2023年）、「瞬く皮膚、死から発光する生」足利市立美術館（栃木、2020年）などに参加。

主な受賞歴に、日本写真協会賞作家賞（2022年）、第16回木村伊兵衛写真賞（1991年）、第3回東川国際写真フェスティバル新人作家賞（1987年）がある。

作品は、東京国立近代美術館、東京都写真美術館、神奈川県立近代美術館、シカゴ美術館（アメリカ）、ジョージ・イーストマン博物館（アメリカ）、ヒューストン美術館（アメリカ）などでコレクションされている。

＜作家の言葉＞

1987年に、私が東川町国際写真フェスティバル新人賞を受賞した時、国内作家賞が奈良原一高さんでした。

ご一緒に賞状を受け取った時の様子や、すごい写真家の皆さんと濃厚な数日を過ごしたことは、今でも大切な記憶です。

自分の写真集をあらためて見てみると、そこに写っているものは、40年前のキャベツ、30年前の鰯、私が、その時のまま新鮮に変化することなく存在していて不思議です。

それが写真の魅力と思います。

20代で写真を始めて現在まで、積極的に写真活動をしてきたとも言えませんが、飽きて止めることもなく続けてきたのは、底知れない執着と言うより、微弱な執着と、やさしい協力者と、あるがままの日常のように感じます。

東川賞が長きにわたり続いて、多くの写真家が受賞されたことに感謝致します。

今 道子



焼き豆腐帽子、2024
Grilled Tofu Hat, 2024



心臓とメリーゴーランド、2024
Heart and Merry-go-round, 2024



繭少女、2017
Cocoon Girl, 2017



竹輪犬、2024
Chikuwa Dog, 2024



鳥王子、2020
Bird Prince, 2020



山羊少年 2、2017
Goat Boy II, 2017



Photo by HIRABAYASHI Takeshi (grasshopper)

第41回写真の町東川賞　＜新人作家賞＞

鈴木 のぞみ（SUZUKI Nozomi）

埼玉県在住

1983年埼玉県生まれ。現在も同地を拠点に活動している。2007年に東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻を卒業。2015年に東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程を修了し、2019年、平成30年度ポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスに滞在。2022年に同大学院博士後期課程（先端芸術表現研究領域）を修了。

主な個展に「HIRAKU Project Vol.16 鈴木のぞみ『The Mirror, the Window, and the Telescope』」（ポーラ美術館 アトリウム ギャラリー、2024年）、「Words of Light」（第一生命ギャラリー、2024年／師岡制作所、2023年）、「アーティスト×横浜市所蔵カメラ・写真コレクション 鈴木のぞみ展」（横浜市民ギャラリーあざみ野、2023年）がある。

また、東京都写真美術館での「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14」（2017～2018年）、「TOPコレクション セレンディピティ 日常のなかの予期せぬ素敵な発見」（2023年）や、アーツ前橋での「潜在景色」（2022～2023年）などのグループ展に参加。

2024年、第27回岡本太郎現代芸術賞に入選。VOCA展2016でVOCA奨励賞、アートアワードトーキョー丸の内2015でフランス大使館賞、TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD 2015で後藤繁雄賞、群馬青年ビエンナーレ2015でガトーフェスタ ハラダ賞を受賞。

2022年には写真作品集『LIGHT OF OTHER DAYS』（rin art association）を刊行。作品はアーツ前橋、東京都写真美術館、第一生命保険株式会社、ガトーフェスタ ハラダに収蔵されている。

＜作家の言葉＞

2014年の写真フェスティバルではじめて東川町を訪れ、たくさんの方と出会いました。いまでもご縁があることを感慨深く感じています。

事物に宿る記憶を可視化したいという思いから、対象に指標的なメディウムである写真に惹かれ、2011年より現在のような制作を模索しはじめました。以来、小穴投影現象や光による投影、光の透過や屈折、反射などの物理的現象により、事物に見出すことができる潜像を「事物の記憶」であると捉え、写真の原理を通した顕在化を試みてきました。

私の日常にある個人的な事物にはじまり、その対象は自ずと近代以降の歴史や集合的記憶と結びついた事物へ繋がっていきました。私は作者というよりも「光の言葉」を伝える媒介者、あるいは翻訳者であれたらと思います。そのような私の制作行為に対し新人作家賞をいただけることは身に余る光栄です。これからも事物の来歴を通してそこにある記憶を思索し、事物に導かれながら制作を続けていきたいです。

鈴木 のぞみ



The Rings of Saturn：舷窓−アイリッシュ海
The Rings of Saturn: Porthole – The Irish Sea
2020
イギリス製の舷窓、写真乳剤
Photo by KIGURE Shinya



The Rings of Saturn：燭台付き鏡−蝋燭
The Rings of Saturn: Mirror with Candleholder – Candle
2021
イギリス製の鏡、蝋燭、写真乳剤
Photo by KIGURE Shinya



The Rings of Saturn：片眼鏡−あるイギリス人男性の眼
The Rings of Saturn: Monocle – A British Man's Eye
2024
イギリス製の片眼鏡、写真乳剤
Photo by KATO Ken



Other Days, Other Eyes：田中邸2階寝室の窓
Other Days, Other Eyes: Windows from the Bedroom of the Second Floor of Tanaka Residence
2021
解体された家の窓、写真乳剤
Photo by KATO Ken



Monologue of the Light：見沼自然公園
車止めに設えられたクマの目の穴から　緑区　埼玉
Monologue of the Light: A View Through the Eye Hole of a Bear Installed on a Parking Barrier, Minuma Nature Park, Midori Ward, Saitama
2024
ゼラチンシルバープリント



Words of Light：壊れた塵取りの穴から　埼玉
Words of Light: A View Through a Hole in the Broken Dustpan, Saitama
2021
リバーサルフィルム



第41回写真の町東川賞　＜特別作家賞＞

守屋　友樹（MORIYA Yuki）

京都・東京在住

1987年北海道生まれ。京都・東京在住。日本大学芸術学部写真学科卒業、京都造形芸術大学（現京都芸術大学）大学院修了。在学中に写真の古典技法や古写真に関する歴史を学び、美術と繋がりのあるピンホール現象やカメラオブスクラなどの技術に注目するようになる。
自ら撮影した阪神淡路大震災で被災した部屋の写真を20年以上の歳月を経て見返したとき、そこに地震そのものは写っていないことに気づくと同時に、被災前の日常の記憶が甦ったという経験から、写真が内包する二つの意味の「写らないもの」に興味が湧き、写真を主な表現手段として使い始めた。かつてあった景色や物、出来事などを想起する手立てに関心を持ち、不在や喪失をテーマに制作を行っている。
主な展覧会に、「潮騒の部屋」五条半兵衛甃　ホールKeiryu（京都、2024年）、「第11回札幌500m美術館賞入選展」500m美術館（北海道、2024年）、「すべ と しるべ 2022 #01『蛇が歩く音』」Gallery PARC（京都、2022年）、「影を刺す光ー三嶽伊紗+守屋友樹」京都芸術センター（京都、2020年）、「きりとりめでると未然の墓標（あるいはねこ動画の時代）2019-2020」パープルームギャラリー（神奈川、2019年～2020年）など。他、第21回写真「1_WALL」奨励賞 増田玲選（2019年）、第14回写真「1_WALL」奨励賞 鷹野隆大選（2016年）。
https://yk-mry.com/

＜作家の言葉＞

歴史ある東川賞の特別作家賞をいただいたことを嬉しく思います。
「潮騒の部屋」を作り始めたのは、2023年にイスラエルがガザに侵攻を始めてから二ヶ月ほど経つ頃でした。日々、凄惨な様子が報道されるなか、私は真っ暗にした戦争遺跡の内部で、過去の戦争や今も続く諍いのことを想像しながら作業をして過ごしていたのを思い出します。暗澹たる思いをしながらピンホール・ルームに投影される像の美しさに感動してしまった事実に、居心地の悪さを感じずにはいられませんでした。
私は複雑で切り分けられない感情のグラデーションを持っていることに改めて気づき、その情動を肯定する言葉を今も探しています。未だ暴力が終わらない時代だとしても、暗がりのなかを明るく歩くように生きたいと願いながら制作した思いは今も変わりません。私の作品が少しでも過去の戦争の記憶を想像させ、現在の争いに目を向ける機会になれば幸いです。
作家活動を支えてくれている家族や友人、知人の皆さまに深く感謝を申し上げます。

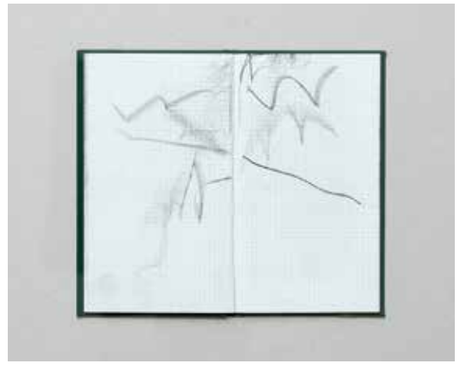
守屋　友樹



潮騒の部屋 01　2023年
Distant peal
2023
ピンホール・ルーム内でフィルムに露光



潮騒の部屋 02　2023年
Distant peal
2023
ピンホール・ルーム内でフィルムに露光



潮騒の部屋 03　2023年
Distant peal
2023
ドローイング、グラファイト、ノート、鉄
ピンホール・ルーム内で投影される像をノートに描き写したもの



潮騒の部屋 04　2023年
Distant peal
2023
ドローイング、グラファイト、ノート、鉄
ピンホール・ルーム内で投影される像をノートに描き写したもの



潮騒の部屋 05　2024年
Distant peal
2024
ピンホール・ルーム内でフィルムに露光



潮騒の部屋 06　2024年
Distant peal
2024
ピンホール・ルーム内でフィルムに露光



張ヶ谷弘司「わびあいの里建設現場」1984年
©HARIGAYA Koji

第41回写真の町東川賞　＜飛彈野数右衛門賞＞

阿波根 昌鴻（AHAGON Shoko）

沖縄県上本部村（現本部町）出身（1901–2002）

1901年、沖縄県上本部村（現本部町）生まれ。
キューバやペルーへ移民した後、1934年に帰国。沖縄・伊江島で農民学校実現を目指して活動するも沖縄戦となり、各地の収容所を回り2年後に帰島した。1955年に米軍はさらなる基地拡張を推し進め「銃剣とブルドーザー」と呼ばれた強制的な土地接収を行ったため、阿波根は農民たちと共に非暴力の土地闘争を展開する。米軍の横暴、射爆演習場による島民たちの被害を記録すべくカメラを入手して島の記録を始め、抵抗の手段とする。「乞食行進」と呼ばれる行脚や陳情を展開するなかで、沖縄における軍用地をめぐる住民と米国民政府との間に起きた「島ぐるみ闘争」の一翼を担うようになる。
1982年、生前唯一の写真集となる『人間の住んでいる島』を出版する。収録されている闘争の写真以外にも、阿波根は島の人々のポートレイトや日常のスナップを数多く遺した。1984年には反戦平和資料館「ヌチドゥ宝の家」、福祉の拠点としての「やすらぎの家」を中心とする「わびあいの里」を設立し、反戦平和の活動に生涯をささげる。2002年、永眠。
2024年に「阿波根昌鴻　写真と抵抗、そして島の人々」展（原爆の図 丸木美術館／埼玉、立命館大学国際平和ミュージアム／京都）、「人間の住んでいる島」展（東京工芸大学写大ギャラリー／東京）が開催。同年「さがみはら写真賞」を受賞。主なパブリック・コレクションに、東京工芸大学写大ギャラリー、相模原市など。上記以外の著書に岩波書店刊の『米軍と農民―沖縄県伊江島』（1973年）、『命こそ宝―沖縄反戦の心』（1992年）がある。

＜作家の言葉＞

阿波根昌鴻（1901–2002）が亡くなってから23年の月日が経とうとしている今日、沖縄からはるか遠くの北海道の地で阿波根の写真が評価され、このように素晴らしい賞をいただけることを大変うれしく感じております。
戦後も米軍の占領下にあった沖縄では、敗戦から約10年も経過しようとしたときに各地で米軍による土地の強制接収の嵐が吹き荒れます。その中の一つに沖縄本島北部の西側に位置する離島・伊江島がありました。
阿波根は米軍の不条理に抗う手段として、当時の伊江島では唯一のカメラを手に入れ、横暴な土地接収の実態や演習に伴う被害実態などを記録しました。
阿波根は厳しい土地闘争の最中にあっても、島の日常も写し続けてきました。その中には島の多くの人々の写真もあります。阿波根が守りたかったものは、まさにこのような穏やかな島の日常であったのではないかと思います。
今回の受賞対象となった写真も1955年から1960年代にかけて撮られたものです。

一般財団法人わびあいの里
理事長　謝花 悦子



幕舎生活（真謝）、1955年
Tent Life, Majya, 1955



阿波根昌鴻家跡（真謝）、1955 年
Ruins of Home of Ahagon Shoko, Majya, 1955



乞食行進・平和通り（那覇）、1955年
Beggar's March, Peace Avenue, Naha, 1955



演習地・クリスチャンの米兵に十字架の看板を立てて訴える若者（真謝）、1955年
The Cross Raised in Appeal to Christian Soldiers of the United States of America, Majya, 1955



真謝の子供と山羊（真謝）、1955－67年
Children and Goat, Majya, 1955-67



記念撮影（川平）、1955-67年
Memorial Photograph, Kawahira, 1955-67

第41回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業2025～

＜受賞作家作品展＞

会期：8月2日（土）～9月1日（月）　会期中無休

時間：10：00～17：00（8月2日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：100円（8月3日、4日は無料開放）

海外作家賞……アルトゥーラス・ヴァリャウガ

国内作家賞……今 道子

新人作家賞……鈴木 のぞみ

特別作家賞……守屋 友樹

飛彈野数右衛門賞……阿波根 昌鴻

●8月2日（土）

13：30～14：30　授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00　テープカット（会場：東川町文化ギャラリー）

17：00～18：30　レセプション「受賞を祝う集い」

●8月3日（日）

13：00～17：30　受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査会委員、ゲスト

※感染症防止等のため、事業が変更・中止・延期となる可能性がございます。

■■■　写真の町とは　■■■

1984年、東川町に開墾の鍬がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川町は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、この若い町よりも、わずか半世紀ほど早く生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル」（通称：東川町フォトフェスタ）が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末から8月頭に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やフォーラム、東川賞歴代受賞作家屋外写真展、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えています。

さらに、1994年からはじまった、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる「全国高等学校写真選手権大会」（通称：写真甲子園）では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し、「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意するものです。

■■■　写真の町東川賞規定　■■■

●趣旨
写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞
写真の町東川賞＜海外作家賞＞　　１名　賞金１００万円
写真の町東川賞＜国内作家賞＞　　１名　賞金１００万円
写真の町東川賞＜新人作家賞＞　　１名　賞金　５０万円
写真の町東川賞＜特別作家賞＞　　１名　賞金　５０万円
写真の町東川賞＜飛弾野数右衛門賞＞１名　賞金　５０万円

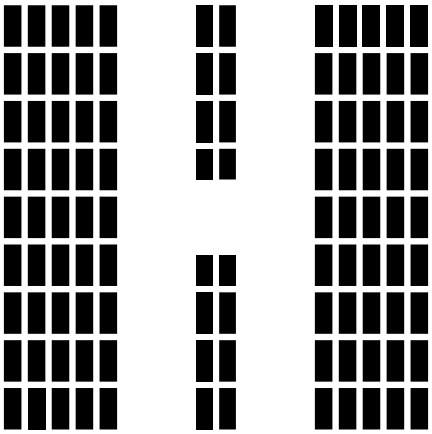
●対象
海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。
国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去３年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。
特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

●審査・表彰
東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作家を、東川町長が委嘱した委員で構成する［写真の町東川賞審査会］において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念フォーラム等を開催します。

●その他
受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、［写真の町・東川町文化ギャラリー］に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。
賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。

フォトフェスタHP

東川町 HP　https://higashikawa-town.jp/
フォトフェスタ HP　https://photo-town.jp/
https://twitter.com/Higashikawa_PF
https://www.facebook.com/Higashikawa.PF/
https://www.instagram.com/higashikawa_pf/



〈お問い合わせ先〉

写真文化首都 北海道「写真の町」東川町

〒071-1423　北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号　東川町文化ギャラリー内
東川町役場 写真の町課（担当：大角・吉里）
TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704
E-mail: photo@town.higashikawa.lg.jp
https://photo-town.jp/

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家作品展出品作に限りません。